

報 告

第 72 回日本歯科理工学会学術講演会報告

平成 30 年度秋期第 72 回日本歯科理工学会学術講演会が、北海道大学大学院歯学研究院生体材料工学教室教授吉田靖弘先生を大会長として 2018 年 10 月 6、7 日に北海道札幌市の北海道大学学術交流会館にて開催された。本大会における一般講演の演題数は 21 題、ポスター発表 87 題の計 108 題であった。また、特別講演、シンポジウムおよび Dental Material Adviser/Senior Adviser 特別セミナー、ランチョンセミナー、企業展示が開催された。

今大会は、2018 年 9 月 6 日に震度 7 を観測した北海道胆振東部地震から 1 カ月であり、行楽シーズンを前にして各種イベントの自粛ムードが蔓延していた。また、折しも台風 25 号が発生し、帰路への影響が懸念されていたが、そんな天災を吹き飛ばすかのように、両日とも会場は多くの参加者で賑い、活発な討論が行われた。

大会初日の口頭発表では主にコンポジットレジン、接着、生体材料をテーマにした講演と 1 題の研究奨励賞応募口頭発表の計 10 題の講演が行われた。また、ポスター発表では、レジン、接着、生体用セラミックスをテーマとした計 43 題の質疑応答が行われた。特に、近年保険収載されたことで研究者・臨床家から俄然注目を集めている CAD/CAM 用レジンプロックに関する研究や、骨に近い弾性率を有していることから新たなインプラント材料として注目されているポリエーテルエーテルケトン (PEEK) に関する研究が比較的多く見られた。

今大会の特別講演は 2 題あり、2 日間に分けて行われた。初日は北海道大学大学院医学研究院整形外科学教室教授の岩崎倫政先生によって「高純度アルギン酸ゲルを用いた新規軟骨再生治療法の開発と臨床応用」と題して

行われた。現行の軟骨再生治療法の最も解決させるべき点はその侵襲度であり、それを解決するにあたり組織再生誘導法を選択しアルギン酸ゲルを用いることで、低侵襲の軟骨再生治療法を開発中とのことであった。現在治験データの解析中で、それまでの基礎研究、開発の困難さ、また再生医療には作用メカニズムの限界と問題点の提示が重要とする大変貴重な講演であった。

2 日目の特別講演はベルギー・ルーベンカソリック大学 Van Meerbeek Bart 教授によって「The frontiers of dental adhesives -Translational research from laboratory outcome to clinical outcome」と題して行われた。Van Meerbeek Bart 教授は Journal of Adhesive Dentistry のエディターチーフでもある。前半は接着前処理についてであり、Etch-and rinse と Self-etch それぞれの利点欠点を自身の研究などをふまえて講演された。また接着の新たなステップとして、抗菌性、再石灰化作用、anti-enzymatic を配合したセメントについて、接着歯学の現状・展望とともに紹介された。

大会 2 日目の口頭発表では生体用セラミックス、チタンを中心とした計 11 の口頭発表が行われた。またポスター発表では生体組織、コンポジットレジンに加えて、セメントや模型材などの歯科材料を対象とした幅広いテーマが見られた。計 44 題の質疑応答が行われ、初日同様多くの参加者が見られた。

札幌は震災の影響が微塵にも感じられないほど、秋色づく自然豊かな町並みであった。また、行き交う人々も大変活気に満ちていた。最後に、今大会は吉田靖弘大会長、赤坂 司準備委員長を始めとする運営スタッフのご尽力により、つつがなく進行し、盛況の内に終了した。これもスタッフ皆様の入念な計画と準備の賜物であると深く感謝し、第 72 回日本歯科理工学会の報告とさせていただきます。

笠原正彰
(東京歯科大学 歯科理工学講座)

